

# 幼 兒 教 育

第二十一卷  
第十一號

大正十年十月十五日發行

## 神童と幼兒教育

文學博士 吉 田 熊 次

高知市の某小學校の尋常三年生に吉田豊道と云ふ神童が居る、といふ事を東京の或る新聞で讀んだ事があつた。此の夏ちようと高知に參つたので、其の小學校長に逢つて、吉田豊道と云ふ生徒の事を聞いて見たが、如何にも驚くべき智能を有して居る。といふくわしい報告を得たのであつた。尙ほ此の生徒に就いて、學校に這入る迄にどんな家庭教育を受け

たか、殊に母親はどう云ふ注意をとつたか、といふ事等くわしく聞きたいと申した所、校長さんは色々周旋してくれて、母親と生徒とを私の宿まで、連れて来てくれた。

生徒の智能は如何にも異常なる發達をこげてゐて土佐名所案内の中の、古戦場の地圖に關する一節を

讀ませて見たら、すこぶる難解な漢文ばかりのものであつたにも拘はらず、其の兒童はわけなく讀んでしまひ、然も、讀み方の速度等も極めて敏速で、發音も甚だ正確なものであつた。少くとも讀書力に關しては尋常小學校卒業生と雖も、此の兒童ほどには行くまいと思はれた。

そこで、どんな本を讀んだか、と兒童に聞いて見たら何とも答へないので、「名前を云つて御らんない」と云つたところが、「澤山あるから」と云ふ答であつた。それぢや、「幾冊ほど持つてゐますか」と尋ねると、歴史に關する本と雜誌とを合せて七十八冊、地理に關するものは五十二冊、其他のものは字引等を加へると百七十二冊ある、その中の凡そ三分の一

は小學校入學前に讀んだ、といふ事であつた。尤も、この兒童は、歴史地理に最も多くの興味を有してゐて、東西の偉人の傳記や物語、そんな事に關する雜誌を非常に愛讀してゐた、いかにもこれだけ讀めば、尋常小學校卒業以上の讀書力は充分得られる、といふ事は明らかに考へられた。

今度は、母親に向つて、「あなたはどうか云ふお心持でこのお子さんをお育てになつたか」と尋ねて見ると、母親の答へは次のやうであつた。母親は現に其の市の或る病院の看護婦をしてゐて、父親はこの兒童が七歳の時に亡くなつてしまつた。父親は長く病氣をしてゐたので、主として母親がこの兒童の教育にあつたのである。母親が此兒童を教育するにあたりて、特にいちじるしい教育上の意見としては有してないが、「子供には心配をさせない。子供を苦しめてはいけない」と云ふ事を絶えず頭に置いてゐた。子供がいやな思ひをさせられたり、叱られたりする場合は、非常に精神を苦しめるわけになつて、これが爲め子供の腦を無駄に働かせる事になる、それ故、出来るだけ無駄をさけて、悪い方面でなければ、なるべく子供の好む方面に子供の頭をつかはせるやうに

したのであつた。母親は此の兒童を殆んど叱つたりする事なく育て、來たが、三歳の折常々してはならぬと云つて居つた事をしたので、此の兒童を初めて叱つたので、大いに泣き叫んだ、常に泣き聲を聞いたことのない近所隣の人々はどうしたのかと心配してくれたといふ話もある。悪い事でない限りは子供の自由にまかせ。尤も子供が一方にのみ偏して興味がむいた時は、それとなく轉じさせるやうにし、「してはいけない」と云つた事はないさうである。子供の心の働きを少しも無駄に使はせない、子供の好むままにさせ、子供の頭腦の働きの全部は、何等かの結果を子供に残させるやうに、母親は心掛けてゐたやうに思はれる。これは教育法として面白いものと思ふ。

ちやうど其の坐に、古く大學を出られた大八木と云ふ理學士の方が居られ、よくに希望してこの様子を見て居られたので、其方が次のやうな質問をされた。「そのやうに子供の自由にまかせて置くなら、他の子と遊ぶ時に我儘をしないか、學校等で他の生徒と仲よく遊ぶ事が出来るか」と云ふやうな事を尋ねると、母親の答は、「學校の事は自分にはわからない

が、家庭では他の子と遊んで我儘するやうな風が見えない、尋常三年にもなつてゐるが、赤んぼのやうに極めて無邪氣な者と遊んでゐる。これは家庭でいぢめられたり叱られたりする事がないので、赤んぼと同じ無邪氣さを持つてゐるやうに思はれる」といふ話であつた。又其の坐に居られた校長さんも言葉を加へられて「學校に於て他の生徒と折合の悪いやうな事はない。活潑にあばれるところはしないが仲よく遊んで居る」と云はれた。この話は私は面白い事と思ふ。

これは私の理屈の上から云ふ事かも知れないが、かふ思ふのである。子供に我儘とか、ひねくれるとか云ふのは、子供自身でそんな癖をつけるものではない。ねぢけたことをして見せるか、さうでなければ子供をしてそんな癖をつけるやうに、側でしむける、例へば、我儘をする癖をつけるしむけ方としては、わきの者が子供にへつらて子供の機嫌をとつてやる。或は子供に別に禁止しなくてすむ事を禁止して置いて、然も中途から其禁止を破つてしまつて子供の我を通らせる、といふやうな類である。子供は自分の好む事が常に満足させられるといふ事であれば

わきに居る人々の好む事にも子供は自然と従ふものである。言ひかへれば子供は自分の云ふ事もわきの人が聞いてくれるから、他の人の云ふ事も自分がきかなければならないと、子供は思ふやうになる。子供の好む通りにさせる事によりて、我儘であるとか、ひねくれるとかはせぬものだ、と私は信じてゐるのであるが、此兒童の實際はやゝ私の意見を證明してゐるやうに思はれて、興味ある事と考へたのである。

思ふに、吉田豊道といふ兒童は、生れつき極めて智能の鋭敏な子供であつたのではないかと思ふ。母親の話された事に依ると、生れてから十四五ヶ月位の頃、言葉も話せない時から、よその店にある看板を見る事が好きであつた。これは言葉こそ話さないが、兒童自身では其の看板を讀んで覺えて居つたのではないかと思ふ。その前を通ると、兒童は喜んでその方へゆきたがつたさうである。これは小さい時から文字を讀んで居つたのであらう。又ランプ位の大きさの相撲取りの繪を描いたのがあつて、相撲取りのまはしに名が書いてあるだけで、繪は皆同じものであるのに、一々其を區別してゐたと云ふのを見て、文字が解つたのであると思ふ。

母親の話では初めは漢學を覚え、それから假名を覚えて行き、小さい時から、讀むのが好き、又讀むのを聞いてるのが好きであつた。この兒童の文字に對する興味を利用して、心配させないやうに、腦を無駄に使はせぬやうにして、兒童の腦を全部を此の方面に向けたから、學校に入る前に、既に尋常三四年生の讀む本を讀んで居り、又他から教へてやつたのである。此の兒童は天性智能のすぐれてゐたのを、母親の注意で有効に開發したのである。母親の云ふには、決してわきから無理に教へない、例へば鳥の繪が描いてある傍に「鳥」と云ふ字があつても、子供が何だと聞いた時に初めて鳥と云ふ字であると教へてやつたと云ふ。子供の要求する物にこちらも應じて教へてやるのであるから、教へることも無駄にはならない。

神童と云はれるのは、天性もあらうが、その天性を充分に發達させる教育の結果もあるではないかと思ふ。この兒童の體質は見ただけでもよくない、學校でも丙であるといふ。別に病氣をもつてゐると云ふ事はないが、顔色等も青白く多少神經質らしく見えるから、神經過敏も加つて居ることゝ思ふ。なに

しろこの兒童は智能に於ては全くすぐれてゐることは疑はざる所である。今後どのやうに發達するか解らないが、とにかく神童とか天才とか云はれる子供にしても、幼兒教育上の注意がゆきとツかなかつたら、今日の如き成績を上げ得なかつたと思ふ。例へ所謂神童といふ子供に育てないまでも、幼兒の教育と云ふものは、大なるものである事が、この神童を見るにつけて、つくづく感じさせられるのである。

### こども愛護宣傳デーの標語

大阪市教育部子供愛護宣傳デー當日に於ける標語を懸賞募集してゐたが審査の結果左の如く發表された。

愛せよ、敬せよ、

強く育てよ

(一等)

こども育てよ

先づ眞直にまんまるに

(二等)

自然と自由は

こどもの生命

(同)

目玉でおどすな

笑顔でさとせ

(三等)

打つな叱るな

甘やかすな

(同)

小言の雨は

こどもの心をこめらす

(同)